

異文化体験のライフコース分析

—「かつての帰国子女」の追跡調査—

第二部報告

原 和子

I はじめに

前回の報告(原 1992)¹⁾は第二次大戦下(1934~1943年設置)の帰国子女学級、「東洋英和女学院・別科」(原 1990)²⁾の卒業生を調査対象として「子どもの時の異文化体験の影響は長期的に継続し、その後の個人の生活の軌跡(ライフコース)を通して作用し、その痕跡を残している。」との調査仮説のもとに、ライフコース分析の視点からインタビュー調査を行い、そのライフコースの展開を異文化体験からとらえることを試み、その結果を第一部として報告した。

本報告第二部では、第二次世界大戦勃発以前1938~1941年の別科・女学科卒業生を前期コーホート、戦争末期1944~1947年の卒業生を後期コーホートとし、これらのコーホート(cohort)*について、インタビュー調査で得られた個人のライフコース分析データをもとにコーホート分析を行い、各同一コーホートの共通性(ライフコースパターン)を夫々析出し、各コーホートのライフコースパターンの比較、更に同一コーホート内の個人のライフコースの分析から、共通に見られた特徴、異なった独自のライフコースを見出し、

* コーホート Cohort

同年齢集団、又は同時出身集団、同年卒業集団。

第二次大戦の影響で、そのライフコースがどう変わったか、またそのライフコースに、異文化体験の影響・痕跡がどのように見られるかを考察することを目的とする。

帰国子女の異文化体験の影響・痕跡についての追跡調査の先行研究として、追跡期間の長期的なのは、アグネス・M・ニエカワ(1985)³⁾の報告「成人したかつての帰国子女の過去再検討」と、中西晃ら(1988)⁴⁾の報告「青少年時代の異文化体験が人格形成に及ぼす影響」である。前者は、成人したかつての帰国子女22名〔(男6名、女16名)年齢：19歳～25歳18名、30歳～36歳4名、サンプルの帰国後の年数：最も長期が14年、平均7.8年〕に徹底した面接調査を行い「…異文化体験の形跡は表に見えなくなっても、性格形成に残っている。…これらの人達は不撓不屈の精神を持つようになって、matureな人間に成長している。…皆異文化を吸収した形跡が何らかの形で内面的に残っているということが出来る。」と報告している。後者の調査対象者は東京学芸大学附属大泉中学校及び附属高等学校大泉校舎を卒業し、大学を卒業した社会人10名〔(男4名、女6名)年齢：24歳～30歳、平均26.2歳、帰国後の年数：最も長期が15年、平均11.4年〕である。インタビュー調査結果の考察として「帰国後多年を経過した帰国子女にとって、現在でも異文化体験は、各個人にとって大なり小なり、何らかの意味をもっていることがわかる。むしろ帰国後一定期間を過ごしたことにより、海外体験をし、受けてきた影響は、表面的に見てとれるものというより、一人ひとりの生活、人生、あるいは人格の中で『エッセンス』のようなものとなって残っていると思われる。」と報告している。

本研究では調査対象者の帰国後の年数は半世紀以上にも及び、最も長期にわたっているので、過去想起法によるバイヤスのかかったデータであることが問題点となる。しかし、一方に、全員異文化体験者で、同じ学校学科の卒業生で共通した教育体験をもち、同一社会の成員として太平洋戦争を共通に体験しており、ほぼ同年齢の女性集団(コーホート)が得られる等の統一条件をもつサンプルであることからライフコース分析の視点を導入、前回行わ

なかったコーホート分析を試み、検討を行った。ライフコース分析の視点の特色は「個人を同年齢集団又は同年卒業集団等のコーホートに所属させ、コーホートごとにまとめて個人のライフコースを観察することにより、多様ななかにかに一定の傾向性を発見しやすくしていることである。年齢をそろえることは、一定の年齢で経験すべき入学・卒業等ライフコースの節目を同じ年代に通過したこと、およびライフコースの進路を左右する時代の影響を同じ年齢で受けたことをほぼ保証するので、傾向性の発見を容易にするのである。」(稲垣 1988)⁵⁾と考えられている。

Ⅱ コーホート分析の方法

1. 面接協力者

前回(1992)の調査の10名の面接協力者に加え、今回(1994~1996)の調査では、前期1名、後期8名の協力を得、インタビュー聴きとり調査を行い、前期Ⅰ-5名、前期Ⅱ-4名、後期-10名計19名のライフコースデータを得てコーホート分析の資料とした。面接協力者19名を次の前期、後期のコーホートとし分析を行った。太平洋戦争以前の1938(S13)年から1941(S16)年迄の別科、女学校の卒業生は30名。このうち前期コーホートの面接協力者は9名であるが、これを更に前期Ⅰ、前期Ⅱの2つのコーホートにわけて分析を行った。(注：卒業年度の「昭和」をSと略記。)

A. 前期Ⅰコーホート(5名)

別科・女学科卒業の第1回生は、1938(S13)年卒業の3名である。翌1939(S14)年卒業生1名、1936(S11)年別科のみの卒業生1名を加えた5名は全員在米邦人の米国二世でハイスクール卒業後来日した留学生である。

これを前期Ⅰコーホートとした。

B. 前期Ⅱコーホート（4名）

太平洋戦争勃発直前の1940（S15）年卒業生1名と1941（S16）年卒業生3名計4名は11、2歳で別科に入学したカナダ、英国からの帰国子女で、これを前期Ⅱコーホートとした。

C. 後期コーホート（10名）

太平洋戦争末期の1944（S19）年から、戦後の1947（S22）年迄の卒業生10名を後期コーホートとした。

2. 同一コーホートの共通性（ライフコースパターン）の分析手続き。

第一部報告（1992『教育研究35』P.161）の面接手続きに準ずる方法によってインタビューとデータ化を行った。

3. 分析の視点

A. 各コーホート毎に各人のインタビューライフストーリーデータから各人の具体的な特徴、ライフコースに共通に見られた特徴を考察し、同一コーホートの共通性（ライフコースパターン）を析出する。

B. 各コーホートのライフコースパターン比較を行うことによって、前期Ⅰ、前期Ⅱ、後期の3つのコーホートのライフコースパターン分析を試みる。

C. 同一コーホート内の分析

共通体験への個人の解釈や意味づけの違い、またその人だけの個人的体験を考慮して個人のライフコースを捉える。

以上のコーホート分析で得られた、特徴的な個々人のライフヒストリーから、第二次大戦の影響で個人の生活がどう変わったか。また異文化体験の影響がどのように見られたか。「かつての帰国子女」の異文化体験の痕跡は半世紀余の歴史の変遷を経て、現在どのように見られるかを考察する。

Ⅲ 結果と考察

1. コーホート分析

A. 同一コーホートの共通性（ライフコースパターン）の析出。

(1) 前期 I コーホート

(a) 「別科」は1934 (S 9) 年に東洋英和女学校小学科に設置された当時の「帰国子女受け入れ学級」であるが、10歳から20歳までのかなりの年齢差のある生徒が一つのクラスにいるという特異な学級であった。これは海外に長く駐在した外交官・商社員らの「帰国子女」の他に、米国、カナダ在住の日系邦人成功者らが、その二世の教育を母国日本で受けさせたいと、その子女を留学させて来る場合の受皿の一つとなっていたので、ハイスクール卒業後の17、8歳の留学生在がいたからである。前期 I コーホート5名は全員米国二世の留學生である。

(b) 前期 I コーホート5名 (A、B、C、D、Kさん) のプロフィール。

太平洋戦争勃発時は (22~25歳)、終戦時を (26~29歳) で迎えている。

A : ハワイ生まれ。1935 (S10) 年ハイスクール卒業後16歳で別科入学。1938 (S13) 年女学校卒業後ハワイ大学留学、1年後再来日。S16年開戦前に日本人と結婚、以来戦中、戦後日本在住。日米の二重国籍。

B : ロス近郊生まれ。1935 (S10) 年ハイスクール卒後18歳で別科入学。1938 (S13) 年卒業。1941 (S16) 年6月日本人と結婚、シンガポールに赴任。帰国後夫は応召、1945 (S20) 年7月戦死。日米の二重国籍。

K : ロス近郊生まれ。Bの妹。1935 (S10) 年、15歳で別科入学。1939 (S14) 年卒業。1942 (S17) 年日本人と結婚、夫と共に中国赴任。敗戦直前S20年に帰国。以来、大磯在住。日米の二重国籍。

C：ロス生まれ。1935（S10）年、ハイスクール卒業、大学在学中の18歳で来日別科入学。1938（S13）年卒業。J社に就職1年半後、1940（S15）年帰米。日本滞在5年間。日系米国二世と結婚、米国在住。米国籍。

D：ハワイ生まれ。1934（S9）年別科入学18歳。1936年（S11）年別科卒。静岡英和入学。1937（S12）年退学、帰米。日本滞在4年間。日系米国二世と結婚。米国（ロスアンゼルス）在住、米国籍。

(c) 面接において表現された具体的特徴（インタビューデータより）

① 日本在住のAさんのケース。

ー日本に永住するようになった事情と帰属意識についてー

「私は戦争勃発の3ヶ月前に支那事変で3年間戦地に居り、帰還したばかりの日本人男性と見合結婚しました。23歳の時です。この頃、別科生の半分はアメリカに帰りました。アメリカ二世はアメリカが生まれた所育った所だからアメリカに帰った人が多かったのです。私と妹（S15年英和卒業）がいましたので両親は、日本が嫌いだった兄だけをハワイに残して交換船で日本に帰って来たのです。両親は娘達がハワイに帰らぬ様に日本人との結婚をすすめたのだと思います。父は亡くなるまで『あの時、日本にそのままおいたのは悪かったかな。向こう（ハワイ）に帰っていた方がよかったかな』と言って居りました。母は『いいえ、あの時日本に帰って来て、皆日本人になれたのだからよかったですよ』と言って居りました。開戦の時に日本にいたためにずっと日本にいることになりました。私にもアメリカに帰らず日本に残り、日本人と結婚したことがよかったかどうかわかりません。日本人と結婚してずっと日本に住んでいても私には日本人に成り切れない部分があります。しかし、一方にアメリカ人ですとも言い切れない。死ぬまで、私は二つの国民、心は二つあるのです。日本で暮らしていて、もしもアメリカだったらとよく考えます。アメリカでは、夫々のレベルで楽ができる。アメリカの方が住みやすいですね。」

② 日本在住のBさんのケース。

—来日時の異文化体験と現在の帰属意識について—

「1934（S9）年、17歳で別科に入るため来日しました。戦前の軍国主義の日本で、何から何までアメリカと違うので二年位は『アメリカへ帰りたい、帰りたい』と思っていました。アメリカ人は喜怒哀楽をはっきり出すし、フランクですが、日本人は何もはっきり言わないでかげで言う。表面に出さないのので何を考えているかわからぬ。心がせまい。それが一番いやで一年くらいは『日本がきれい』と思っていました。日本で育った兄（早稲田大学在学中）から、敬語などわからない日本語を教えてもらいましたが、『犬が召し上がった。』等といい笑われたりしました。今は日本語と英語は、話す（会話）のは同じ位ですが読み書きは今でも英語が楽です。アメリカ文化の中に17歳まで育った私にはアメリカ人の痕跡が未だ身についています。アメリカの学校では星条旗を毎日見上げて、胸に手をあてて忠誠を誓うのですが、長い間いつも感激し乍ら旗を見上げて育ってきたので、1941（S16）年結婚して夫の赴任地のシンガポールに行った時、星条旗の上がるのを見て感激した記憶があります。孫が高2位の時、英語を見てあげた宿題を提出したら、学校の先生にたずねられ『家には外人の親戚がいるから教えてもらっている。』と答えたそうで『外人』と見られるところがいつまでもあるのかと思います。毎年ロス在住の弟の所に3ヶ月位訪ねるのですが、日本にいる時は、日本人になり切ってもアメリカの土をふんだら、すぐ自由でのびのびアメリカ人になるのです。」

③ 日本在住のKさんのケース。

—現在の帰属意識について—

「私は大きなアメリカの自然の中で育ったのだから率直で正直。日本の仏教の家の長男の所にお嫁に来て、日本人の『本音と建前』がわからず苦勞した。今でも日本人の『表と裏』がわからずお嫁さんに教えられるのだけれど、イヤ味をイヤ味ととらず率直で素直だったから、

おしゅうとさん達とも巧くいったの。私は両方の国籍をもっているけれど日本人だと思う。もし戦争があったら子や孫のいる日本につく。私が幸福だと思うのは周囲が二世のおばあちゃん（私）に理解があるからなの。」

④ 米国に帰ったCさんのケース。

「英和卒業後、ジャパントイムスに就職したが1年後の1940（S15）年6月に退社、帰米しました。日米間の国交が険悪になっていたため、両親が戦争を心配して米国に帰りました。大学に入学しましたが、すぐ結婚しました。相手は米国日系二世で、私と同様に、日、米語が話せます。日本式の見合い結婚です。結婚後1ヶ月位で開戦、アーカンソー、アリゾナとあちこちのキャンプに転々と収容され、ニュージャージーにいた時戦争が終わりました。戦後67歳でリタイアするまで、S大学、生化学部門でセクレタリとして31年間勤務していました。夫は日本語と英語の教師をしており、今年金婚式を迎えます。日本には大きくなって（18歳）行ったのでそれに5年間しかいませんでしたから、日本人にはなりきれませんでした。私は米国人だと思っています。」

⑤ 米国に帰ったDさんのケース。

「別科を卒業して、父の故郷の静岡英和女学校に入りましたが2・26事件がおきたので親が心配して1937（S12）年に米国に帰りました。1938（S13）年に米国二世と見合い結婚しました。22歳の時です。戦争中は2歳と4歳の子供2人をつれて1942年にキャンプ入りをし、1945年にオクラホマのキャンプに収容されて終戦まで苦しい生活をしました。その後離婚、1949年再婚。キャンプを出た後、サンディエゴの外国語学校で日本語を教えました。別科で日本語を学び、日本文化にふれられた事を感謝しています。日本には4年間しかいなかったけれど、楽しい思い出があります。私は米国人です。……but日本人も少し？」

- (d) 前期 I コーホートに見出された共通な特徴 (ライフコースパターン)
- ① 年齢 (76歳~79歳) 平均78歳 (1996年現在)
 - ② 外国滞在地・出身：米国在留邦人成功者の二世でハイスクール卒業の15~18歳で来日した当時の米国人留学生。
 - ③ 別科の教育：S9、S10年15~18歳で別科入学、1~2年後女学科4、5年に進学、別科入学から3年間の学習で女学校5年の課程終了。S13年女学校卒業の第一回生3名、S14年卒業1名。卒業年齢は一般生徒より1~3歳年長の19~21歳。
 - ④ その後の学歴：米国大学1年課程終了 (2名)。
 - ⑤ 結婚：相手は日本人 (3名)、米国人日系二世 (2名)、結婚時期は開戦前S13年~16年が (4名)、開戦後S17年は (1名)、結婚年齢は23歳 (4名)、21歳 (1名) である。形態は全員が見合結婚。
 - ⑥ 居住地：日本在住3名。米国在住2名。
 - ⑦ 国籍：日米の二重国籍3名。米国籍2名。
 - ⑧ 戦争中：戦争中は二つの国の迫間で、敵国人扱いを受け、米国在住者はキャンプに強制収容され、日本在住者も夫は応召、婚家で空襲、食糧難、物質不足等苦難の時を過ごした。
 - ⑨ 戦後：二重国籍をもっている日本在住者は、米国人軍属として米進駐軍 (憲兵隊、航空隊等) に通訳、翻訳、速記等の仕事で勤務、高級待遇をうけ、よい生活となる。米軍帰還後も外資系会社でキャリアを生かして定年迄勤務、子女を立派に養育した。米国在住者も、日本語・英語力を生かして語学教師、セクレタリとして、大学等に勤務、その子女は大学教授、会社役員として成功している。
 - ⑩ 帰属意識：Aは「米国と日本のどちらとも言い切れない。両方にある。」
K「日米の戦争になれば日本人。」 C・Dは「米国人です。」 Bは「読み書きは今でも英語が楽です。アメリカの土をふんだら自由でのびのびアメリカ人になる。」

(2) 前期Ⅱコーホート

(a) S14年にヨーロッパで第二次世界大戦勃発、翌S15年は日独伊三国同盟が結ばれ、日米英三国間の外交は険悪になりつつあった。この頃米国二世の別科生の多くが米国に帰った。翌S16年12月に太平洋戦争が勃発した。前期Ⅱコーホート面接協力者は太平洋戦争が始まったS16年の卒業コーホート3名（F、G、Hさん）とS15年卒1名（Eさん）計4名である。

(b) 前期Ⅱコーホート4名（E、F、G、Hさん）のプロフィール。

太平洋戦争勃発時（18～20歳）、終戦時を（22～24歳）で迎えている。

E：日本生まれ。10年間（2～12歳）トロント在住。1934（S9）年、12歳で別科入学。1940（S15）年卒。1974（S49）年渡米以来米国在住。日本国籍。

F：日本生まれ。10年間（1～11歳）トロント在住。Eの妹。1934（S9）年、姉とともに帰国、11歳で別科入学。1941（S16）年卒。1943（S18）年S女子大英文科専門部卒。1946（S21）年日本人商社マンと結婚。日本在住。日本国籍。

G：日本生まれ。11年間（2～13歳）ロンドン在住。1935（S10）年13歳で別科入学。1941（S16）年卒。日本人と結婚。日本在住。日本国籍。

H：ニューヨーク生まれ。米国在住6年間（0～3歳、4～6歳）、ロンドン在住3年間（10～12歳）、外国在住計9年間。1934（S9）年12歳で別科入学、1年後小学部6年編入、1941（S16）年女学校卒。G院高等科に進学1年後の1942（S17）年日本人と結婚。日本在住。日米の二重国籍。

(c) 面接において表現された具体的特徴（インタビューデータより）

－戦時中の体験－

① E、F姉妹のケース

戦争が多くの人々の運命を狂わせたが、E、F姉妹も開戦によってカ

ナダ帰国、トロント大学進学の途をはばまれ、父だけをトロントにおき、家族は東京に残った。音信不通の為家族を心配した父は、富裕な貿易商であったが、カナダ在住20年間に築き上げた全財産を没収され、S19年に交換船で帰国した。FはS女子大卒業後、徴用のがれ**もあって、Eと共にNHK（当時のラジオ東京）に勤めた。短波放送をきいて日本語に翻訳、タイプを打つ仕事であったので、戦局もわかりサイパン島が落ちた1994（S19）年に敗戦を予想したと言う。別科生で日英混血の友人も同居していた彼女達の家は、食糧難に加えて敵国人扱いで白眼視され、東京大空襲で焼き出される迄、憲兵の見張り特高の尾行がつき、きびしく辛い時代であった。

② Gさん、Hさんのケース

前期Ⅱの他の2人（G、H）は開戦初期のS17年に夫々19歳で見合結婚をした。戦時態勢下のことで、夫は海軍軍医、海軍経理将校など軍籍にあった。

Gさんの話：「夫が海軍軍医だったので、その赴任先の長崎航空隊にいた時に原爆投下され、私の住居は、投下地点より山一つ隔てた向こう側だったので助かった。妊娠8ヶ月だったが三日三晩かかって、東京へ向かった。途中で車が止まった。その時終戦の詔勅をきいた。赴任する時、電車の中で『モンペをはいていない』ので、憲兵に咎められた。夫が軍医だとわかると態度が変わったが、当時は電車の中で英語の本を読んでいたたり、パーマをかけていると咎められたのです。」

Hさんの話：「夫が海軍経理将校でしたので、その赴任先の呉、仙台、釜石と幼い子供達をつれて転々としました。戦争末期にはそれらの地点は米軍の攻撃の的になり、機銃掃射、艦砲射撃をうけ恐ろしい思いをしました。」

**徴用のがれ

1943年25歳未満の未婚の女子は、勤労挺身隊として、動員されたので、就職していれば、他へ徴用されることは、なかった。

－戦後の体験－

敵国語として排斥されていたので、英語のできる人が極端にすくない時代、別科の人達は、日本政府からも連合軍側からも、ひっぱりだこの貴重な人材であった。殆どの人は政府各機関、連合軍及びその施設、極東軍事裁判等で、通訳、翻訳、速記者として活躍した。

Fさんの話：「終戦と同時にNHKは接收され、私と姉はNHKをやめ、姉はワシントンハイツでbanquet managerとして就職しました。カナダ国籍の妹も接收された帝国ホテルに就職しましたが、この仕事は言葉ができるだけでなく、日本と米国の両方の生活を知っている人でなくてはできないのです。」

Gさんの話：「終戦後、商工会議所の渉外部に頼まれて行き、英語の手紙の翻訳と英語で返事をかく仕事をした。一日一人が10通しか出来ないのに、私は一日50通やってしまったので、次の日は部長が『午後は遊んで来い』と言った。GHQの会議録をとる仕事もした。」

Hさんの話：「別科の人達は引っぱりだこで、この時期に『英語』の仕事をしなかったのは、子育てで忙しかった私位だったでしょう。」

(d) 前期Ⅱコーホートに見出された共通な特徴（ライフコースパターン）

- ① 年齢（73歳～75歳）平均74歳（1996年現在）
- ② 外国滞在地・出身：Gだけが英国（ロンドン）駐在の商社マンの「帰国子女」で他の3名は、Hが米国（ニューヨーク）、E、Fの姉妹がカナダ（トロント）の在留邦人の子女である。Hだけが米国生まれ、他は日本生まれである。海外滞在期間は11年、10年（2名）、9年で平均10年である。

③ 別科の教育

別科が設置された初期のS9、S10年に入学、11～13歳の「自己形成臨界期」（箕浦 1984）前段階の年齢での帰国である。

別科在学1年（H）、2年（G）、3年（E、F）で、比較的短期間の学習の後、年齢相当学年より1年下の学年に進学した。4名とも卒業

年齢は一般生徒より1歳だけ年長である。海外滞在期間の長さ、帰国年齢からみると、そろって、かなり速い適応と考えられる。

- ④ その後の学歴：女子大卒業1名。大学専門部1年課程終了1名。
- ⑤ 結婚：相手は3名とも日本人、2名は戦時態勢下で海軍軍医、海軍経理将校、戦後に結婚した1名は商社マン。
結婚時期はS17年（2名）、S22年（1名）。
結婚年齢は19歳、20歳、24歳である。形態は全員見合結婚。
- ⑥ 在住地：日本在住3名、米国在住1名（E）。
- ⑦ 国籍：日本国籍3名、日米の二重国籍1名（H）。
- ⑧ 戦時中：E、F姉妹の家は、日英混血の友人が同居していたので、特高の尾行がつき、敵国人扱いで、白眼視された。物質不足、食料難に加え、五月の空襲で焼け出された。軍人と結婚したG、Hは夫の赴任地で戦争末期には、激しい空襲、艦砲射撃等の危険にさらされた。
- ⑨ 戦後は外務省、商工会議所、極東軍事裁判、進駐軍施設等で別科生のバイリンガル、バイカルチュラルの特性を発揮した。進駐軍帰還後も日本の復興に伴い、彼女達は国際外交、文化交流の場にユニークな活動を展開している。
- ⑩ 帰属意識は日本在住のF、G、H3名は、はっきり「日本人」と言うがEは「日本よりアメリカの方が住みよい。在米22年になるが、アメリカ永住したいと思う。自分は変な日本人だ。日本人離れがしている。」と言う。

（3）後期コーホート

- （a）太平洋戦争は1941（S16）年12月8日勃発、1945（S20）年8月15日に日本の敗戦により終結した。1934（S9）年4月に発足した別科は10年目の1944（S19）年4月に閉鎖された。別科・女学校卒業生の最終学年は1948（S23）年で、2名であった。戦争末期の1944（S19）年から1948（S23）年迄の卒業生は30名で、これを後期コーホートとした。後期コーホート面接協力者はS19年卒（L、M）2名、S20年-

5年卒（N、O、P、Q）4名、4年卒（I）1名、別科のみ在学、N女子大付属21年卒（J）1名、22年卒（R、S）の2名、計10名である。S21、22年卒の3名は敗戦後の卒業生である。S19年卒の人迄は充実した授業を受けられたが、S19年には女学校3年以上の生徒に学徒動員令が発令され、S20年は勤労奉仕で殆ど授業がなかった。S20年3月には、5年卒業の他に4年で繰上げ卒業が行われたので、2学年が卒業した。後期コーホートの面接協力者は10名である。前期Ⅰ－5名、前期Ⅱ4名とほぼ同数の5名にしぼって後期コーホートのプロフィール、インタビューデータの具体的特徴、共通な特徴の比較検証を進めた。10名を5名にしぼるにあたって卒業年度の最も後期の22年卒業生2名と20年卒業生3名の5名を選んだ。21年卒の1名と20年卒の他の3名は第一部に於てインタビューのライフコースデータをとりあげたので、これを除いた。後期のメンバーを終戦年のS20年、5年卒の（N、O、P）3名と終戦後のS22年卒の（R、S）2名の計5名とした。

(b) 後期コーホート5名（N、O、P、R、Sさん）のプロフィール。

太平洋戦争勃発時（13～17歳）、終戦時を（17～21歳）で迎えており、R、Sさんは女学校4年在学中であった。

N：日本生まれ、ニューヨーク、3～7歳、4年間。再びニューヨーク、10～16歳。ニューヨーク在住計10年間。1940（S15）年帰国。別科入学16歳。1943（S18）年女学校4年進学、1945（S20）年卒。日本人と結婚。日本在住。日本国籍。

O：ビルマ生まれ、ニューヨーク、0～5歳、シアトル、5～11歳、滞米11年間。1937（S12）年別科入学11歳。1940（S15）年女学校1年入学。1945（S20）年卒。同年4月T塾専門学校理科入学、翌年英文科へ転科、49年同大英文科卒。日本人と結婚、のち離婚。日本在住。日本国籍。

P：バンクーバー生まれ、カナダ二世。1939（S14）年帰国。15歳。1年

後別科入学。1943年（S18）年女学科4年進学、45年（S20）年卒。
日本人と結婚。日本・カナダの二重国籍。

R：ロンドン生まれ。ロンドン、0～7歳、7年間、シンガポール、8～11歳、3年間、再びロンドン、11～12歳、1年間。外国在住12年間。1939（S14）年11月～40（S15）年1月まで2ヵ月間の船旅で帰国。1940（S15）年別科入学、12歳。1942（S17）年女学校1年入学。1947（S22）年卒。日本人と結婚。日本在住。日本国籍。

S：ロンドン、6～12歳、6年間。1940（S15）年10月帰国し、別科入学12歳。1943（S18）年女学科2年に進学。1947（S22）年卒。日本人と結婚、日本在住。日本国籍。

(c) 面接において表現された具体的特徴（インタビューデータより）

－帰国の時－

後期メンバーの帰国時は、最も早いOさんが1937（S12）年に父の帰任でシアトルから帰国し、1939（S14）年にPさん一家がバンクーバーから、翌1940（S15）年には、ニューヨークからNさん、ロンドンからRさん、Sさんの3人が帰国している。帰国の理由は、ヨーロッパでの第二次世界大戦の勃発であり、日米英間の国交も険悪になりつつあったので1940（S15）年の帰国者が最も多く、後期メンバー10名の中6名がこの年に帰国しているが、別科から米国に帰った二世もこの年が最も多い。

- ① Rさんの話：「1939年9月6日、ヨーロッパで第二次世界大戦が勃発。1940（S15）年1月に帰国した。ロンドン生まれで7歳までロンドン、シンガポールに8歳から11歳まで3年間在住、またロンドンに戻り12歳迄1年間いた。シンガポールにいた時日本人小学校に行って日本語を初めて習った。滞英20年余の両親は家庭でも日本語を使わず英語で話し、日本に帰る時まで『自分は英国人だ』とばかり思っていた。英国から日本迄の2ヵ月かかった船旅の間、『自分が二つにわかれたような気になっていた。』5年後、生れた故郷英国と育った

国日本との戦争が終わって『ほっとしたが、何とも複雑な気持』だった。」

- ② Sさんの話：「私はロンドンに6歳から12歳迄6年間いて、幼稚園と現地小学校に通いました。1940（S15）年第二次世界大戦勃発、ダンケルクの撤退直後の10月帰国しました。帰国後も英国から手紙がずっと来ていました。開封され、検閲の印が押してある手紙でした。戦争中はとだえましたが1946年から文通が復活し、今も続いています。1964年に24年ぶりに英国に帰り（？）ました。」

—帰国後の生活（戦中・戦後）—

帰国時の別科入学年度はOさんだけが戦前のS12年で、女学科2年の時、戦争が始まった。他のN、P、R、Sさんら4人はS15年に別科に入学し、翌年太平洋戦争が始まった。

- ① Nさんの話：「年齢も、行っていた国も違っていても、別科の中では、同じように国語が出来ない、漢字が書けない、敬語の使い方がわからない等で皆同じような仲間が、肩をよせ合って過ごしていたという感じでした。学力回復以上に苦勞したのは日本式の生活様式、態度、感覚に慣れない事でした。」Nさん、Pさんの2人は対人文化文法の最も重要とされる「自己形成臨界期」（養浦1984）⁶⁾の9～15歳を異文化で育ち、新しい文化型への行動の切替が困難で帰国ショックが大きいとされる年齢での入学であった。「睡眠時間をへらして必死に勉強しました。若い人はすぐ追いついて日本語を話すようになるのですが…」
(Nさんの話)

回復には大変な努力を必要としたがNさんは別科在学2年、Pさんは3年間で女学校3年、4年に進学、年齢より2歳下の学年で共にS20年に卒業した。Nさんは小学校2年～3年の日本での教育体験があること、またPさんの場合はバンクーバーによい日本語学校があり小学生の頃から日本語習得に通学していたことが、比較的早い修得の理由と考えられる。他のOさん、Rさん、Sさんは文化的自己が確立して

いない11歳、12歳の入学で、日本語修得は早く、Oさん、Sさん2年半、Rさん2年の別科在学で、3人とも1歳下の女学科の学年に進級し、卒業した。

- ② Oさんの話：「私の父は銀行員で、ビルマ、大連、ニューヨーク、シヤトルに駐在。長女の私はビルマ生まれ、アメリカで育った。私は11歳で初めて日本に帰り、すぐ別科に入ったが日本語が全くわからず苦勞した。それ迄母がT塾を出ていて英語ができたので、家庭での両親との会話は英語だったし、帰国しても、お隣りの宣教師の家に同じ年頃の子供達がいる、毎日学校から帰るとそこで遊んでいたのが殆んど日本語を使わない生活だったから、日本語が読めず、読まなければならない時は暗記して行った。それでも別科に2年半いて女学校1年に入学したけれど、国語の徒然草も暗記して行って読んだ。『そう書いてあります？』と先生に笑われた。2年になる頃には、そんなに苦勞しなくなったがT塾に入る頃迄日本語が弱かった。塾1年生の8月、終戦となり、翌年英文科に転科し、更にとび級してS48年にT塾大を卒業した。勉強のきびしさで知られるT塾で転科し、とび級する為の勉強で、『勉強とはこう言うものだ。』と思った。英和時代は勉強なんて全くしてなかった。」
- ③ Pさんの話：「私はバンクーバー生まれのカナダ二世です父は戦争直前、一家で帰国。私はハイスクール中退の15歳でしたが、入れる学校がなくて困っていました。一年のブランクの後、16歳で別科に入りました。戦争中は別科生は特別視され、英語を話すのに勇気があったが、英和卒業後半年で終戦。今度は英語が出来る人は引っ張りだこの時代になりました。疎開していた静岡県の渉外局から呼ばれ、知事の通訳をし、次に米軍政部の隊長の通訳になりました。姉は戦争中、最初の東京ローズ***で、NHKの海外放送をしていました。終戦後、米軍の教育文化情報局に勤めていた姉の横浜の家に母と共に移る直前に姉が交通事故で亡くなり、1951年になって単身上京、母をよびま

した。外国商社や進駐軍関係の会社の重役秘書の仕事をしました。1957年に結婚し、以来30年余の主婦業、2人の子の母親業、そして17年間の『仕事』の三役をしていました。息子はアメリカ留学、大学院にいます。娘は結婚して矢張りアメリカに駐在。17年間『日本にある外国』に大使秘書として勤めていた『仕事』も3年前にリタイアしましたが、やり甲斐のある楽しい仕事でした。」

(d) 後期コーホートに見出された共通な特徴 (ライフコースパターン)

- ① 年齢：(67歳～72歳)。平均70歳。(1996年現在。)
- ② 外国滞在地・出身：英国(ロンドン)、米国(ニューヨーク、シアトル) 駐在の商社、銀行マンの「帰国子女」4名。カナダ(バンクーバー)の日系邦人の二世1名。ロンドン、ビルマ生まれが各1名。海外滞在期間は6年、10年、11年(2名)、15年で平均10年7ヵ月である。
- ③ 別科の教育：戦争勃発が理由での帰国者4名はS40年別科入学、その中、N(滞米10年)とP(カナダ二世15歳で帰国)は最も適応が困難とされる16歳での入学であったがNは2年、Pは3年の別科在学で年齢相当の学年より2年下の学年に進学した。他の3名は10～12歳の帰国で2年(R)、2年半(O、S)の別科在学の後、年齢相当学年より1年下の学年にスムーズに進級した。
- ④ その後の学歴：5名の卒業者の中、2名が女子大(当時は3年制専門学校)へ進学。OはT塾大、RはT女子大へ進学。
- ⑤ 結婚：全員結婚したが1名離婚。相手は5名とも日本人。女学校卒業後2名はすぐ結婚。年齢は21歳、23歳で見合い結婚である。他の3名は恋愛結婚で結婚年齢は24～32歳。前期では全員見合結婚であるが後期では恋愛結婚が多く、結婚年齢も高い。
- ⑥ 在住地：全員日本在住だが、家族が外国在住しているケースが多い。

***東京ローズ

太平洋戦争中の米軍向けのNHK海外放送の女性アナウンサー、戦意喪失をねらって、甘くやさしい声でよびかける彼女(達)を、兵士達は“東京ローズ”と命名した

- ⑦ 国籍：日本国籍 4 名。日・加の二重国籍 1 名。
- ⑧ 戦時中：開戦時、O 以外の 4 名は別科在学中であったが S17 年、S18 年には女学科に進級した。S19 年に別科は廃止された。東洋永和****では S19 年 3 月迄は敵性語廃止の風潮にもかかわらず週 7 時間の英語を始め、充実した授業が行われていたが、S19 年 4 月学徒勤労動員令が出て勤労動員が強化され十分な授業は出来なくなっていった。S20 年 3 月から 5 月の空襲で東京は焦土となり、R をはじめ多くの人々が焼け出された。田舎に疎開した人々も物資不足、食糧難に苦しんだ。
- ⑨ 戦後：校舎が焼け残った東洋永和は S20 年 9 月には始業式を行い。学校を再開した。焼野原になった東京に疎開先から帰って来た生徒達は、よく勉強した。S22 年卒業の R の学年 66 名の中、R を含めて 4 名が女子大に進学している。家が焼けた上に父親が戦犯やパージになり経済的苦境に陥った人もいる。しかし、「別科」の人達は日本政府機関や進駐軍及びその施設から引っぱりだこで、バイリンガルの英語力で働き、家計を支え、よい生活となった。進駐軍帰還後も国際法律事務所や大使館等に就職し、有能なキャリアとして働いた。
- ⑩ 帰属意識：カナダ二世の P は「カナダが第一の故郷、日本は第二」。他の 4 人は「日本人」と言い乍らも N は「日本とアメリカの両方のよさをとって生きる。」R は「英国は生まれた故郷、日本は育った国。もし戦争がなかったら自分はずっと英国に住んで英国人になっていただろう。」S は「日本人。英国が好き、心のふるさと英国。」O は「レッキとした日本人。日本が住みやすい。」と夫々の思いがある。

B 三つのコーホートパターン比較分析

**** 東洋永和

1941 (S16) 年 4 月、当局の示唆により校名を、東洋英和女学校から東洋永和女学校に改称した。1945 (S20) 年 4 月法人名を東洋永和女学院とし、更に 1946 (S21) 年東洋英和女学院と改称した。

(1) 考察 (三つのコーホートパターン比較)

(a) 国籍 (在住国) : 前期 I (5名)

米国二世の留学生5名のうち2名は、開戦前に米国に帰り、米国籍をもつ米国人である。他の3名は、開戦時に在日、日本人と結婚。戦中戦後日本在住。戦後は米軍軍属 (米国人) として米軍に勤務した。

前期 II (4名) 1名が商社マンの帰国子女で (日本国籍)、カナダ在留邦人の子女2名 (E、F 姉妹一日本国籍)、米国在留邦人の子女 (日米の二重国籍) 1名である。4名とも戦中戦後日本在住。Eは戦後米国移住。

後期 (10名) 全員が帰国子女である。前期は商社マンの子女は1名であったのに対し、大戦勃発で帰国した銀行・商社マンの子女が7名もいる。7名全員が日本国籍である。他の3名はカナダ在留邦人の子女で、3名ともカナダ国籍をもつカナダ二世で、そのうち2名は戦後、米国人と結婚し、米国籍を取得、米国人として米国に在住している。1名は日本人と結婚し日本在住、日本・カナダの二重国籍をもつが、カナダを故郷としている。

(b) 結婚 : 前期は全員見合結婚、米国二世間の結婚形式も見合であった。結婚年齢も当時は見合結婚の場合は23歳までで、24歳以上になると条件が悪くなった。戦後に結婚適齢期を迎えた後期の人達10名のうち見合結婚5名に対し恋愛結婚の人が5名、また結婚年齢は見合が21歳から23歳、恋愛は24歳から32歳になっている。国際結婚も多くなり、後期コーホート10名のうち米国人との恋愛結婚が2名いる。敗戦が日本人女性に自由恋愛の時代をもたらしたことが見受けられる。東洋英和女学校のS20年卒業生は2学年が同時に卒業したが、4年卒149人中21人、5年卒101人中6人が米、英、濠人と国際結婚しており、実に11%近くにあたり、多くても3%の他学年に比較して、際だって多い。

(c) 学歴 : 前期では女子大卒業 (1名) が最高学歴であるが後期では10

名のうち4名が女子大学を卒業している。戦後、女子の進学率が飛躍的に大きくなっていったのが見られる。

- (d) 職歴：戦後は英語のできる日本人が絶対的少数の時代で、バイリンガル、バイカルチュラルの別科の人達は、日本政府と連合軍両方から引っ張りだこで、殆んどの人が日本政府各機関、連合軍及びその施設、極東軍事裁判等々で通訳、翻訳、速記者として活躍した。日米の二重国籍をもつ前期Ⅰの人達は戦後は米軍軍属として米進駐軍の憲兵隊、航空隊、米軍PX等で働いた。戦勝国国籍をもつので、日本人の何十倍もの高級待遇であった。進駐軍帰還後も外資系会社にキャリアとして定年延長で働いている。前期Ⅱの人達の中、戦時中未婚の2人はNHKに就職し、海外放送をきき翻訳する仕事をした。終戦後は主として日本政府各機関、極東軍事裁判、進駐軍施設で働いた。進駐軍帰還後は国連外務省国際会議、オリンピック委員会の英文速記、翻訳、東京、札幌オリンピックのチーフコンパニオン、歌舞伎の海外公演の英語指導等国際文化交流の場で活躍した。豊富な海外生活体験を生かし「家事術講座」を開講、ユニークな活動を展開している人もいる。後期の人達の中でカナダ国籍の2人が終戦後進駐軍やその施設で、バイリンガル、バイカルチュラルを發揮した。後期では大学進学者が多いが、国際機関の外国大使館や法律事務所の大使や所長秘書、出身大学の英語講師、NHK国際放送のアナウンサー等、長期的なよい仕事をしている人が多い。

- (e) 帰属意識（文化的アイデンティティ）

前期Ⅰ（5名）A、B、Kは米国日系二世の留学生であったが、開戦時に親が帰国したので留学生ではなく帰国子女となった。日本人と結婚し、戦中戦後日本に在住している。三人とも日、米両方に帰属意識をもつ。「米国の方が暮らしやすく、米国に行くと、自由でのびのび、アメリカ人になる」が「戦争になれば、子や孫の住む日本に帰属する」と云う。

前期Ⅱ（4名）、E、F、G、H 4人とも日本人。Eだけが米国在住22年で「米国に永住したい。私は日本人離れがしている。」米国に帰属していると思われる。

後期（10名）Nは日本に帰属意識があるが、「日米のそれぞれのよさをとって生きる。」Oは「日本人」を強調する。

R：日本国籍だが「英国は故郷、日本は育った国。11歳で日本に帰るまで英国人だと思っていた。戦争がなかったら英国人になっていただろう。」と英国に半分帰属意識がある。

S：日本人だが「英国が好き。」

L、M、Qは日本人。

P：カナダ二世、カナダに帰属意識をもつ。

I：米国人（カナダ二世）米国人と結婚し、米国在住。

J：米国人（カナダ二世）帰米二世と結婚、米国在住。「国際人でありたい」と云う。

(別表1参照)

2. 全体的考察

A. これまでインタビューの結果同一コーホートの共通性を折出し、ライフコースパターンの比較を行って来たが第二次大戦の影響からライフコースがどの様に変ったか、事例から考察する。

事例1：E、F（前期Ⅱ）、Iさん（後期）姉妹のケース。

「11歳の時、姉E（12歳）と二人、日本での教育を受ける為帰国した。私達は二人一緒ということで特別に受け入れられて、姉が女学校を卒業する迄、5年間寄宿舎にいた。S15年に寄宿舎を出て弟、妹と母、家族5人の住む家を借りた。S16年私が卒業したので姉と私はトロント大学へ進学する為にカナダへ帰る予定で、7月に外務省へパスポートの申請

に行ったところ『今は情勢が不安定だから11月まで待つように』と言われた。しかし、12月8日の開戦によって私達のトロント大学進学の実夢は破れた。父だけがトロントに残り、家族5人が東京に居ることになり、その後音信不通になり、情報の得られなかった父は、『戦争はいつ終わるのかわからない。家族に永遠に会えなくなる』と思い、カナダ在住20年、貿易商として成功していた会社も家も全財産をカナダ政府に没収され、S19年に交換船で帰国したのです。5月の空襲で焼け出されるが全員無事で間もなく終戦となった。英語力のある私達にとって大変良い時代が到来した。妹のIは戦争中、『カナダ人、敵国人』と言われて悩み、学校へ行けなくなっていたが、終戦後は『戦勝国のカナダ人』で、連合軍に接収された帝国ホテルに、英国籍のジニーと共に就職した。部屋をもらって、敗戦国民の日本人とは天と地の違いの外人待遇でした。姉もNHKをやめて、ワシントンハイツで同じ仕事をした。バイリンガル、バイカルチュラルでなくては出来ない仕事でアメリカ軍の社交界でも二人は引っ張りだこだった。妹はS26年に米海軍軍人と結婚、フィラデルフィアに行った。姉も、米国人が好きで、米国に行った。私は将校クラブでダンスをするより歌舞伎が好きで母と共に観に行く方で、抵抗なく日本人と結婚した。三人姉妹三人三様である。妹は父が偏愛し甘えっ子だったが、戦争中の体験、フィラデルフィアでの苦労が彼女の人間形成をしたのではないかと思う。母の晩年、至れりつくせり面倒をみた。母も『Iがこんなに立派な人になるとは思わなかった。』と感謝していた。私達は米国人、日本人になって、姉も妹のいるサンディエゴに住み、夫の赴任で5年間ホノルル在住の後、東京に住む私も、毎年出かける。弟も市民権のあるトロントでなくロスに住んでいる。

事例2：Rさん（後期）のケース。

〔父が開戦後2年半も英国に抑留され、帰国後空襲で家が焼け、戦後パージになった。〕

「1939年9月6日ヨーロッパで第二次世界大戦が始まって、11歳の私は

母と2人だけで二ヶ月の船旅で日本に帰った。私はロンドンで生まれ育って自分は英国人だと思っていたので、自分が二つに分かれたような気になって大変ショックだった。しかし帰国後は別科に入って、友達ができ、楽しくなり、日本と日本語に慣れるのは早かった。2年後に女学科1年に進級した。その9月に英国に2年半抑留されていた父が交換船で帰国、学校を初めて休んで出迎えに行った日の嬉しさを、今も覚えている。英国が参戦してから帰国したので着のみ着のまま、洋服がなくて困ってカーテンを洋服に仕立てて着たりした。半年間位だったが、特高の刑事がいつも家の前に立っていた。家のラジオを調べに入ってきたりした。親戚も少なく、田舎もなくて、食料に不自由していたので、その刑事さんが食糧をくれたりした。5月に空襲で焼け出され、恵比寿から洗足（祖父の家）まで、母と二人で歩いて避難した。父は会社の株主総会で居なかった。戦後父は商社の役職にあったのでパージになった。女子大を卒業した時（S25年）上級学校に行きたいと思ったが、家の経済的事情の切実さがその時わかった。しかし英国流の考え方をしていた両親は「就職は女のすることではない。」と就職も出来なかった。両親は英国風のおめかしさと日本流のきびしさがまざって非常にきびしかった。車の運転などもってのほか、口紅、化粧も駄目、門限10時半、今になれば、よかったと思うが、当時は大変不満だった。S27年に結婚した私は母譲りの英国風生活様式を今も守っている。もし戦争が無かったら両親は英国に永住するつもりだったから、私も英国人になっていただろう。」

B. ライフコースに異文化体験の影響・痕跡がどのように見られるか。前項と同様に事例から考察する。

(1) 自然体験。

ライフコースに大きく影響し、未だに強く残っている「異文化体験」の痕跡として、子供の時に育った米・英の豊かな大自然環境をあげる

人が多い。

事例3：Kさん（前期I）のケース

[アメリカ砂漠地帯の大自然にふれてクリスチャンの母に育てられ、自分の性格、価値観の原点がそこにあると語る。]

「私はアメリカで育った事をととてもよかったと思っています。馬に乗って大自然の中を走る。大きなアメリカの自然はとてもよかった。母がクリスチャンで、クリスマスは家族全員が晴れ着を着て教会へ、特にイースターは全部新調の晴れ着を着て、イースターボンネットをかぶって。イースターサンライズサービスは砂漠地帯で野外礼拝をする。砂丘の間から太陽が出る。鉄砲百合のような花、黄色いマーガレットのような花、砂丘が紫やピンクやとりどりの花に染まって美しい。私は大きなアメリカの自然の中に育ったのだから、私は率直で正直……。」

事例4：Oさん（後期）のケース

[植物、生物への関心を持つようになった原体験が5歳から11歳迄いた自然がたっぷりのシアトルであったと語る。]

「シアトルは自然がたっぷりで子供が悪い(?) ことをするのに最高の場所、家のねえやに命令され子供達でブラックベリーをいっぱい採って来た。近所の人に、売ってほしいと言われ、『しめた!』とばかり箱に入れて売って、お菓子を買って食べた。後で母にひどく叱られ『お金を返してこい!』と言われて、一軒一軒返しに行った。アメリカの自然の中で育った故か、理科(生物)が大好きになって英和を卒業した時、T塾専門学校(当時)理科へ進学した。」

事例5：Mさん（後期）のケース

[Mさんのプロフィール：ロンドン、6歳～13歳、7年間滞在。1938年(S13)年別科入学。1944(S19)年女学校卒。今も残る植物・生物好きと物を無駄にしない習慣は英国での幼児体験からと語る。]

「私の植物、生物好きは、英国で子供の時生物好きのナースに連れら

れて、英国の豊かな自然環境の中で自然の風物に接して育てられたと思います。また、英国の小学校では、ノート、鉛筆等学用品が全部学校から与えられ、ノートは表も裏も無駄なく使い切る迄新しいノートを与えられなかった。先生のサインがないと新しいノートがもらえない。広告用紙を切ってメモ用紙に使う。物を大切に無駄にしない使い方は今だに影響があり、習慣として残り、孫達にもそれをしつけています。」

Rさん（後期）のケースもOさん、Mさんと同様である。「アイルランド人のナースは7歳まで家にいた。自然が好きで、動物、植物への関心、物の見方を教えてくれたので、その影響が強く残っている。女学校でも生物好き、T女子大の理科を受験した位です。」

(2) バイリンガル、バイカルチュラルの特性

Rさん（後期）の話：「英国での家庭での父、母との会話は全部英語、読書も日記もすべて英語。戦争中でも母は英語を忘れぬために英語を話すようにと言い、当時、敵性語の英語をうっかり外で使うと白眼視されたが母は平気で英語を使った。純粹英語だけを話していたのは生涯の1/4だが、真剣に考えたり、感じたりした時、英語がでてくる。お産の時、英語をしゃべったのではないか。と思う。母が病気の時、英語ですべて話した。パッと感じた時、新聞や小説を読むのも英語がよい。母は『私が貴女に残したのは健康と英語力』と言っていた。この他に、母譲りの生活の仕方、考え方、物の見方、価値観に影響があった。」

箕浦（1984、P169）⁶⁾は、「自分を日本人と思うか、或はアメリカ人と思うかという文化的アイデンティティにはどの言葉で自己表現が一番容易にできるかが深く関係している。」と言っているが、Rさんにとって英語は『真剣に考えたり、感じたりした時』自己表現できる一番容易な言葉であり、彼女の『私は英国人だと思っていた。』と言う文化的アイデンティティと関わっていることを示している。

Oさん（後期）の話：「私はアメリカに育って英語力がつき、日本が戦争に負けて、英語の時代になったし、とてもラッキーだったと思う。弟は米国に住んでいて、米国の方が暮らしやすいと言うが、私は日本の方がずっと居心地がいい。私は『私』。神様は日本人としてこの世に送り出して下さったのだから日本人でありたい。もって生まれた『日本人』を大切にしましょう。教養のある立派な米国人紳士のボスの秘書として、長い間仕事をして来て、米国が嫌いというわけでもないが、私は日本と米国の中間にいることに何の不満もない。唯、私の性格としては、喜怒哀楽を表に出し、白黒はっきり、さっぱりした性格で、普通の日本人のもつ灰色の部分がないようだ。」

Nさん（後期）話：「敗戦後の日本では日本が大変アメリカナイズされて、私の異文化体験は大変プラスになっています。私も子供達も3ヶ国語話せますので、仕事は勿論、国際的なボランティア活動ができます。私は日本的慣習にとらわれずに、アメリカ的合理的な方法を見つけようとする。何か仕事を依頼する時に、自分で徹底的に納得してから依頼する。しかしアメリカ人はその時だけの付き合いが多いので、人と人との付き合いは日本式に、よくしてくれる人を見つけたら大事に付き合う。日本のよさ、アメリカのよさの両方知って上手にとりいれて生活している。」

また、「語学力だけではなく、アメリカナイズされた今の日本では『異文化体験』は、二つの国の文化と生活を知っている点で大きなプラスだと思う。」とバイリンガル、バイカルチュラルの異文化体験の特性を評価、意味づけしている。また、「私は誰かと一緒になければ何もできない日本的な人と異なって、独りで行動（海外旅行など）できるし、自分の考え、意見をはっきり言うようなところ、自立しているところ、大変アメリカ的で、40代の頃迄は、『変わっている』『あの人は異人だから』『珍種の蝶々だから』等と言われたが、異文化体験のことが、50代になってから、周囲の日本人と変わらなくなったと自

分で思う。」Nさんは自己形成臨界期の3歳～7歳、9歳～16歳をアメリカ文化の中に育ち、母親は「アメリカ人になったら困る。」と心配していた。開戦の前年に帰国、最も風当たりの強い戦争中の別科に入り、きびしい勉強をやりぬき終戦の年の3月、女学校を卒業、5月に結婚した。米語なまりの日本語、アメリカ的な服装や言動に対し、変り者扱いされたが、Nさんの日本人化と日本社会のアメリカ化が進んだことで、50代のNさんが周囲の日本人と変わらなく見える様になったと言うことであろう。

(3) 文化的アイデンティティ

ライフコース分析の対象者はこれまで見てきたように大戦の勃発によってそのライフコースに影響をうけ、文化的アイデンティティのかたちが変わったケースがみられる。

前期ⅠのA、B、K（Bの妹）さんは米国二世の留学生として来日したが、開戦後も在日、親も帰国し、日本人と結婚した。戦中戦後、半世紀を日本在住。日米の二重国籍をもち、戦後は米軍軍属（米国人）として米軍で働いた。3人とも日米両方に文化的アイデンティティがあると云う。Aは「米国と日本の両方にある。」Bは「読み書きは今でも英語が楽です。アメリカの土をふんだら自由でのびのび、アメリカ人になる。」、Kは「日米の戦争になれば、子や孫のいる日本につく」と云う。Bが最もアメリカへの帰属意識が強いが、3人とも「アメリカは暮らしやすい。アメリカが好き」である。16、7歳まで育った米国に文化的アイデンティティがあると思われるが子や孫のいる日本を離れられないので「両方にある。」ことになる。

開戦前にアメリカに帰ったC、Dさんは「米国人です。」と云う。

前期ⅡのEさんは2歳～12歳までカナダで育ち、日本国籍だが米国好き、米国在住22年、米国永住のつもりである。米国に住む別科の人達の中心的存在である。アイデンティティは米国にあると思われる。

後期のPさんはカナダ二世、日本人と結婚、戦中戦後日本在住だがカナダを故郷と云い、アイデンティティはカナダにあると云う。後期のカナダ二世（カナダ人）のIさん、Jさんは戦後米国人と結婚。米国人となり、米国在住。Jさんのアイデンティティは「国際人」である。

後期のRさんは英国生まれ、11歳で帰国する迄自分を英国人と思っていた。日本国籍、日本人と結婚、日本在住だが現在でも最も自己を表現する言葉は、「英語」で、母ゆずりの英国風生活様式の家に住み、「戦争がなかったら、私は英国人になっていただろう」と云う。

前期Iで戦前に米国に帰った2人は米国人、前期II、後期の他の9人は米国、英国に強い親近感をもち乍らも、アイデンティティは日本にある人達である。

(4) 長くつづく交友関係

Sさん（後期、6歳～12歳、ロンドン在住）の話：「私はロンドンでパブリックスクール（幼稚園・小学校課程）に通ったので英国の歴史はよく知っているが、その間、日本の小学校教育がすっぽりぬけていて、『日本がない』ので、日本の歴史は知らず、日本で皆が知っている極く当たり前のことを知らない。戦争中は絶えていたロンドンの友人、先生との音信が戦後復活、64年に英国を訪れ、以来2、3年おき位に英国への私の『感傷旅行』が続いている。度々の英国訪問、友人との親しい交流で、英国人のものの観方、考え方がよくわかる。その眼で日本の社会、政治を見ると、日本位、外国人に対して、また国民の弱者に対して冷たい国はない。奥尻、普賢岳、阪神などの被害者に対して国の救済措置は十分ではない。国民も『長いものにまかれる』故か、税金のとり方、使われ方にあまり文句を言わない。」等々きびしい観方をしている。彼女の異文化体験は過去の幼稚園、小学校時代の六年間だけでなく、現在まで続いているのである。また「自分をかわいく見せることをしない。率直である。ごまかさない。Whyと

きくことが多い。」など彼女の性格も英国育ちの影響が見受けられる。また、Mさん（後期、6歳～13歳、ロンドン在住）も「英国人はとっつきにくいが非常に長くつきあえる。子どもの時のナースさんが、ゆりかごから墓場までの英国の保険保証制度のあらわれか、保険金が入ったからと2度も日本に遊びに来た。前回は77歳で来日し、2週間滞在して帰った。私も英国ぼけの故か、おおらかな性格で、主人は日本的だが、舅、姑の苦勞を苦勞とせず過ごしている。はっきり物を言いすぎると言われる。」

長くつづく交友関係によって、子供の時の異文化体験で終わるのではなく、生涯にわたって、その痕跡がつづいているのである。

サンプルの多くの海外生活は6年～15年、平均10年とかなり長い上に、帰国後の日本での半世紀にわたる生活の間に、何回もの海外生活をしている。このプロセスによって「異文化体験」の意味付けが変わって来ている。

英国（米国）の言葉と文化と生活を知っていること、更に別科での必死の学習を克服して、日本語を修得し、日本文化を学び、戦中戦後の日本での生活を生き抜いて、殆どの人がバイリンガル、バイカルチュラルとなっていること、国際人としての視野をもつようになっていることに「異文化体験」の意味付け、価値付けがある。

IV おわりに

異文化体験の影響・及び痕跡は、その後の個人の人格形成に深くかかわっていると思われる。「子どもの時の異文化体験の影響は長期的に継続し、その後の個人のライフコースを通して作用し、その痕跡を残している。」ばかりでなく、そのライフコースの課程を通して、性格形成に大きく寄与していると思われる。

個々の人達に、相対的なものの見方、考え方、価値観、発想、他者に依存しない自立性、視野の広さ、「個」の確立、生活の様式、コミュニケーションの方法等にその痕跡を残しているのが見られる。また、殆どの人が、自分の性格について「独りで行動できる。」「自分の考え、意見をはっきり言う。」「率直でごまかさない。」「白黒をはっきり。」「自分の立場や意見をストレートに言う。」等仲間と同じ言動、行動をとらなければならない日本の対人関係への批判を含めて、外国育ちの性格を強調していた。

また、今回対象とした「かつての帰国子女」は特に大戦の経験をもち、これがライフコースにさまざまな影響を与え、文化的アイデンティティの重要な要因になっていることも明らかである。

今後の研究として、ページ数の関係でデータにならなかったものを含め、第一部と第二部をあわせ、総合的な記録として検討を行う計画である。

引用・参考文献

- 1) 原和子 1992「異文化体験のライフコース分析―「かつての帰国子女」の追跡調査(第一部報告)『教育研究35』P.155-172
- 2) 原和子 1990「海外・帰国児童生徒教育の一考察―第二次世界大戦下の帰国子女学級 東洋英和女学院『別科』の事例―」『教育研究32』P.135-159
- 3) ニエカワ・アグネス 1985「成人したかつての帰国子女の過去再検討」『バイリンガル・バイカルチュラル教育の現状と課題―在外帰国子女教育の現状と課題―在外帰国子女教育を中心として―』東京学芸大学海外子女教育センター P.181-242
- 4) 中西 晃ら 1988「青少年時代の異文化体験が人格形成に及ぼす影響 第三章インタビュー調査」東京学芸大学海外子女教育インタビュー調査」東京学芸大学海外子女教育センターP.67-75

- 5) 稲垣忠彦 1988「補講 ライフコースの視点から」稲垣忠彦、寺崎昌男、松平信久編『教師のライフコース』東京大学出版会P.305
- 6) 蓑浦康子 1984「子供の異文化体験—人格形成の課程の心理人類学的研究—」思索社P.254~279、P.169
- 7) 佐藤郡衛 1991「ライフコース研究と帰国子女の特性把握」『帰国子女教育研究プロジェクト第16回研究発表』東京学芸大学海外子女センター
- 8) 青井和夫編著 1988「高学歴女性のライフコース—津田塾大学出身者世代間比較—」勁草書房
- 9) 小島 勝 1990「帰国子女の『追跡研究』の意義と問題—最近の研究に基づいて—」『意文化間教育4』アカデミア出版P.115~126

謝辞

先ず、本稿の執筆にあたり、終始はげまし、御指導いただいたアドバイザーの栗山容子国際基督教大学教授、ライフコース分析研究法導入を御助言、御指導下さいました東京学芸大学の佐藤郡衛教授に御礼申し上げます。

また心よく長時間のインタビューに応じて下さった面接協力者の方々に心からの感謝の意を表したい。

**Life-Course Studies on Cross-Cultural
Experience**
Follow-Up Study of Former Returnees (Part Two)

Kazuko Hara

Summary

I. Purpose

This study aimed to investigate the life courses of Japanese and second-generation emigrants who had lived abroad fifty years ago in a cross-cultural setting when they were children and then came to Japan ("returnees"), and to discover what sort of effects this experience caused in their lives. A survey was conducted on women who had gone through the Special Class for returnee education at Toyo Eiwa Jogakuin (Toyo Eiwa girls' school).

II. Method

1. Cohort analysis

An interview survey was conducted from the viewpoint of life course analysis. Based on the results of analysis of data obtained by the interviews,

shared aspects of life course patterns were identified for each cohort. Common characteristics and unique life courses were then identified by comparison analysis. Cohort analysis was then conducted for the purpose of capturing individual life courses.

The surveyed returnees were divided among two cohorts: those who went through the Special Class and later graduated from a regular class between 1938 (before the outbreak of World War II) to 1941 as the Former Cohort, and those who graduated between 1944 (in the last years of the Pacific War) to 1947 (after the war) as the Latter Cohort. The number of interviewed returnees in the Former Cohort was nine, and in Latter Cohort ten.

2. Case histories

From the individual life histories obtained by the cohort analysis, cases were examined with respect to how life courses were changed by the effects of World War II and what aspects of cross-cultural experience continued to affect returnees at present.

III. Conclusions

1. Returnee life courses changed by World War II

1. A, B, and K of the Former Cohort were *nisei* (second-generation emigrants) born in the US who came to Japan to study in a Japanese school. During their stay in Japan, the war began. All married Japanese men and lived as Japanese during the war. All their husbands were drafted, and one husband died in the war. After the war ended, the times became very favorable to

them. They became civilian employees of the US occupation authorities and were treated as well as Americans.

2. The sisters E and F of the Former Cohort were *nisei* born in Canada. The war began while they were staying in Japan with their mother, another sister and a brother. All property of their father, who was living in Toronto, was confiscated. He returned to Japan in 1944. They lost their home in an air raid. However, after the end of the war, E and F and their brother and sister made good use of their bilingual and bicultural abilities while working in facilities of the Allies. Each led a prosperous life.
3. The father of R, of the Latter Cohort, was detained in the UK for two and a half years after the outbreak of the war, and returned to Japan in 1944. However the family's house was burned in an air raid and her father was purged. Her family experienced great economic distress.

2. Effects of cross-cultural experience

1. As the effects of a "great and abundant natural environment," many returnees pointed out their fondness of nature, interest in living things (animals and plants) and broad-minded, open and honest characters. Also this affected the origin of their sense of values and viewpoints, etc.
2. The cross-cultural experience gave a great benefit to returnees by not only making them bilingual or bicultural and giving them English-language skills, but also in that they knew the culture and lives of two countries. They valued the cross-cultural experience in terms of fostering global views among them.
3. It seems that the effects of cross-cultural experience contributed to creating the personalities of returnees throughout their life courses. The effects could be observed in all returnees from various perspectives, such as relative viewpoint, way of thinking, sense of values, conception, critical

spirit, independence and self-reliance, rationality, broad field of vision,
establishment of individuality, life style and methods of communication.

別表1 コーホートパターン比較(その1)

	国籍	①結婚の時機 ②相手 ③形態 ④年齢	女学校卒業 後の学歴	職歴
前 期 (5人)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 米国二世の留学生(当時) (5人) ○ 日米の二重国籍 日本在住 (3人) ○ 米国籍(2人) 米国在住 	<ul style="list-style-type: none"> ① 全員開戦前に結婚 ② 米国に帰った2人は、 米国二世(米国人) と結婚 日本に残った3人は、 日本人と結婚 ③ 見合結婚(全員) ④ 21~23歳 (平均22.5歳) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 米大学1年 終了(2人) 	<ul style="list-style-type: none"> 戦後 ◎ 進駐軍、憲兵隊、 航空隊、PX等に米 軍軍属として勤務 ○ 極東軍事裁判の 速記者 ○ 外資系会社セク レタリー ○ 英会話教師
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 帰国子女 (4人) (商社マン1人 在留邦人3人) ○ 日本国籍 (3人) (日本在住 (2人) 米国在住 (1人)) ○ 日米の二重国籍 日本在住 (1人) 	<ul style="list-style-type: none"> ① 開戦時期(2人) 終戦後(2人) ② 日本人と結婚(3人) ③ 見合結婚(3人) ④ 19~24歳(平均21歳) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 女子大学卒 業(1人) ○ 大学専門部 1年終了 (1人) 	<ul style="list-style-type: none"> 戦中 ◎ NHK(海外放送) 戦後 ○ 日本政府・進駐軍 施設、極東軍事 裁判等で通訳、 翻訳、速記者 ◎ 国連国際会議、 外務省 オリンピック委 員会、速記者 ◎ 家事術講座 講師 ◎ 歌舞伎 海外公演 の語学指導 ○ 英会話教師
後 期 (10人)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 帰国子女 (10人) (商社・銀行マン (7人) 在留邦人 (3人)) ○ 日本国籍 (7人) 日本在住 ○ カナダ・日本 の二重国籍 (カナダ二世1人 日本在住) ○ 米国籍(2人) 米国在住 	<ul style="list-style-type: none"> ① 全員終戦後 ② 日本人と結婚(8人) 米国人と結婚(2人) 離婚(1人) ③ 恋愛結婚(5人) ④ 年齢24~32歳 ③ 見合結婚(5人) ④ 年齢21~23歳 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 女子大学卒 業(4人) 	<ul style="list-style-type: none"> 戦後 ○ 進駐軍及びその 施設 通訳、速記者、宴会 マネジャー等 ○ 外国商社セクレター ◎ " 大使館大使 秘書 ◎ 国際法律事務 所々所長秘書 ◎ カルチャセンター、 大学等の英語教師 ○ 英会話教師 (註) ◎ その期に独得な 職歴 ○ 各期に共通な職歴

コーホートパターン比較 (その2)

	国籍	①結婚の時機 ②相手 ③形態 ④年齢	女学校卒業 後の学歴	職歴
前 期 (5人)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 米国二世の留学生 (当時) (5人) ○ 日米の二重国籍 日本在住 (3人) ○ 米国籍 (2人) 米国在住 	<ul style="list-style-type: none"> ① 全員開戦前に結婚 ② 米国に帰った2人は、米国二世 (米国人) と結婚 ③ 見合結婚 (全員) ④ 21~23歳 (平均22.5歳) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 米大学1年 終了 (2人) 	戦 後 ◎ 進駐軍、憲兵隊、航空隊、PX等に米軍軍属として勤務 ○ 極東軍事裁判の速記者 ○ 外資系会社セクレタリー ○ 英会話教師
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 帰国子女 (4人) (商社マン1人 在留邦人3人) ○ 日本国籍 (3人) (日本在住 (2人) 米国在住 (1人)) ○ 日米の二重国籍 日本在住 (1人) 	<ul style="list-style-type: none"> ① 開戦時期 (2人) 終戦後 (2人) ② 日本人と結婚 (3人) ③ 見合結婚 (3人) ④ 19~24歳 (平均21歳) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 女子大学卒業 (1人) ○ 大学専門部 1年終了 (1人) 	戦 中 ◎ NHK (海外放送) 戦 後 ○ 日本政府・進駐軍施設 極東軍事裁判等で通訳、翻訳、速記者 ◎ 国連国際会議、外務省 オリンピック委員会、速記者 ◎ 家事術講座 講師 ◎ 歌舞伎 海外公演の語学指導 ○ 英会話教師
後 期 (5人)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 帰国子女 (5人) (商社・銀行マン (4人) 在留邦人 (1人)) ○ 日本国籍 (4人) 日本在住 ○ カナダ・日本の二重国籍 (カナダ二世1人) 日本在住 	<ul style="list-style-type: none"> ① 全員終戦後。 ② 日本人と結婚 (5人) 離婚 (1人) ③ 恋愛結婚 (3人) ④ 年齢24~32歳 ③ 見合結婚 (2人) ④ 年齢21~23歳 	<ul style="list-style-type: none"> ○ T女子大学卒業 (1人) ○ T塾大学卒業 (1人) 	戦 後 ○ 進駐軍及びその施設 通訳、速記者、宴会マネジャー等 ○ 外国商社セクレタリー ◎ // 大使館大使秘書 ◎ 国際法律事務所々長秘書 ◎ カルチャアセンター、大学等の英語教師 ○ 英会話教師 (註) ◎ その期に独得な職歴 ○ 各期に共通な職歴